くすりと健康のはなし 薬包紙

第145回

一般社団法人岐阜県薬剤師会
薬局機能委員会委員
淀江　学

「備えあれば憂いなし」

薬を逆から読むと「リスク」。病気やケガを治してくれる、軽くしてくれるはずの薬。そんな薬のリスクとは何でしょうか。

治してくれる、軽くしてくれる等の主作用とは別に、本来望んでいない作用、つまりは副作用のことを指したものがリスクであると考えられます。あるいは薬を飲まない、使用しないことによる病気の悪化もリスクとして挙げられるでしょう。「備えあれば憂いなし」というように、そんな薬を正しく理解するということは大切です。

まず前提として副作用のない薬は存在しません。薬を正しく使っていても、副作用は出ることがあります。例えば「花粉症の薬で鼻水は止まったけど眠くなった」「胃腸薬で胃痛は治まったけど口が乾く」「解熱剤で熱は下がったけど発疹が出た」。このような症状が出たら、それは薬の副作用です。

理由としては、薬の成分が体の意図しない部分に作用したケースや体調がよくなかったケース、アレルギー、薬や食品との飲み合わせによるもの、あるいは、薬の量を多くまたは少なく飲んでしまったケースなどが考えられます。そのため、どんな副作用が出るのか、どのくらいの頻度やどのくらいの程度で起きるのか、飲み合わせなどを事前に確認する備えや心構えが大事だと思います。

また、医薬品を「適正に」使用したにもかかわらず、入院が必要な重篤な健康被害が生じた場合には、医療費や年金などの給付を行う「医薬品副作用被害救済制度」という公的制度があります。いざという時のために知っておいてください。

薬には大小少なからずリスクがあるものだと認識し、「適正に」使用することが非常に重要です。もし異常を感じたら、すぐに医師や薬剤師などの専門家に相談しましょう。「備えあれば憂いなし」は「備えあれば患いなし」とも書くように、いかに患わないようにするか、または患っても最小限に留めることがポイントです。

医薬品副作用
被害救済制度について
詳しくはこちら
独立行政法人
医薬品医療機器
総合機構
ウェブサイト